



Title	<モビリティ> 社会におけるボランティア・ツーリズムの研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	依田, 真美
Citation	北海道大学. 博士(観光学) 甲第13191号
Issue Date	2018-03-22
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/70672
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Mami_Yoda_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（観光学）

氏名：依 田 真 美

学位論文題名

＜モビリティ＞社会におけるボランティア・ツーリズムの研究

本論文は、人、モノ、情報の移動が常態化し、新たなコミュニティの形が模索されている＜モビリティ＞社会において、観光の持つ意味ならびに観光が果たす役割を再考することを目的として、10年以上継続しているボランティア・ツーリズム事例を取り上げ、その実証的分析に基づきながら、経験的仮説にしたがって大きく以下の三点について考察を行ったものである。すなわち、第一に、継続するボランティア・ツーリズムの実態調査を通じた、受け入れ地域と観光者の関係性についての組織レベルでの考察。第二に、組織レベルでの継続的な活動の鍵となる継続参加者の動機についての、非営利組織論を参照した考察。そして第三に、それまでの考察結果を踏まえた、観光者と受け入れ地域の関係性に関する、ループ図を用いた分析ならびにその特徴の整理、である。

まず、第1章では、序論として本論文の社会的・学術的背景、研究の目的、ならびに本論文における用語の定義と本論文の構成について述べた。

第2章では、先行研究の整理と本論文の独自性について述べた。ポストモダン地理学における空間論では、空間や場所は特定の存在ではなく、空間的諸関係と相互作用的であり、流動的であること、また「未来の進路を、変えることができる (Massey 1993=1997:135)」構築的なものであると認識されるようになった。さらに、＜モビリティ＞の議論では、社会は、不動と移動の複雑な交錯で構成される動的なシステムであり、システムの構成要素が相互作用を通して自己組織化すると論じられていること、また、＜モビリティ＞社会においては、コミュニティ概念の見直しが重要となっているが、近接性を超えたコミュニティの特徴として「不安定な世界の中での対話的な帰属の経験 (Delanty 2003=2006:261)」が認識されるようになった経緯を確認した。

さらに、これまでのボランティア・ツーリズム研究においては、同ツーリズムが利他的な活動を目的とした観光であることから、受け入れ地域を単なる消費対象としてみる「商品化」を是正するのではないかという期待がある一方で、期間限定的に地域外の人びとが地域に関わることによるマイナスの影響があることが論じられている。本論文が研究対象とした継続的なボランティア・ツーリズムは、この対立意見に対して新たな切り口を提供する可能性があるにも拘わらず、この種の研究はいまだないことを指摘した。また、非営利組織経営の分野におけるボランティアの動機や組織上の課題を確認した。

次に、第3章では、ボランティア・ツーリズムという複雑な事象を扱うために、質的研究を採用することの方法論的意義を整理するとともに、事例の選定に関して、活動の継続実績があり、ボランティア・ツーリストが多様な役割をとる条件が必要なことを論じた。こうした条件を踏まえ、本研究における調査対象事例として「小樽雪あかりの路」のOKOVOと「越後妻有大地の芸術祭」の〈こへび隊〉という二つのボランティア団体を事例として取り上げることの妥当性を論じた。

第4章では、「小樽雪あかりの路」のOKOVOが、同イベントにおいて、観光者的な位置付けからイベント運営において重要な役割を担うに至った経緯を時系列で整理した。さらに、その段階的な変化は、受け入れ地域と観光者との相互作用の結果として起こったこと、また、その過程においては、交流や組織化、受け入れ地域による観光者の自律的な活動の受容が大切であったことを明らかにした。

第5章では、ボランティア・ツーリスト団体が活動を長期にわたり継続するうえでの鍵となる、継続ボランティア・ツーリストの存在に焦点を当て、「小樽雪あかりの路」のOKOVOの継続参加者にインタビューとアンケートを行い、その初期参加動機と継続参加動機を明らかにした。その結果、初期参加動機は、観光地としての小樽に行ってみたかったという観光的な要因が大きかったが、継続動機では小樽という場所の持つ多様な魅力や自団体や他団体のメンバーなどとの交流が重要であることが明らかとなった。

次に、第6章では、「越後妻有大地の芸術祭」のサポーターである〈こへび隊〉を取り上げ、〈こへび隊〉の成り立ちや、「大地の芸術祭」及び地域におけるその位置付けを確認したのち、継続参加者の自律的な運営や支援が活動継続には重要であることを指摘した。その上で、運営の鍵となる継続参加者の初期参加動機と継続動機を調査し、初期参加動機では現代アートなどに対する自らの関心が重要であったが、継続動機では、他者との交流や出会いなどが重要な要因となっていること、また継続参加者の多くが、当初から継続参加を予定していた訳ではないことが明らかになった。

第7章では、前章までで明らかになったOKOVOと〈こへび隊〉の組織的な特徴と継続参加者個人の動機を比較整理するとともに、組織と個人の変化をループ図にまとめ分析を行った。その上で、新たなコミュニティが模索されている〈モビリティ〉社会における観光の役割や意味の考察を行った。また同章では、前章までの調査・考察の結果を踏まえ、総合的な考察を行った。OKOVOと〈こへび隊〉の2事例の組織運営では、参加者の流動性の高さや共在と不在を通じたコミュニケーションなどに〈モビリティ〉社会の特徴が現れていることを明らかにした。具体的には、個人の継続動機については、それらが参加当初から存在するのではなく、現場での体験を通じて構築されることを明らかにするとともに、地域、組織、個人のレベルでのボランティア・ツーリズムにかんする要因については、多様な要素が複雑に影響しあっているが、その中に、活動の継続に寄与する正のフィードバック・ループが観察されることを示した。さらに、ボランティア・ツーリズムで体験される身体性を伴う移動とその結果としての自然や地域の人びととの出会いが、具体的な場所と人びとを接続し、一つの新たなコミュニティの形を生む可能性が示唆された。

以上の考察を踏まえ、今後さらに多くの事例研究ならびに領域横断的研究を重ねていくことが課題として残されているが、本研究の結論として、〈モビリティ〉社会における観光の特徴とその意味や役割を、以下の3点にまとめた。

第一に、＜モビリティ＞社会における観光は、観光者にとっての「非日常」という観光実践における共在の時と、「日常」という不在の時を行き来しながら、訪問地域の人びとと観光者とが継続的な関係性を築き、その結果、育まれた信頼がさらなる関係の強化へと結びつく可能性がある。そのプロセスは一方的ではなく、対話的であり、その過程を通じて、地域を超えた人びとが帰属についてコミュニケーションをするコミュニティを育む可能性がある。

第二に、継続的な関係性を維持するためには組織的な仕組みに加え、その関係性にコミットする個人の動機が重要だが、個人の継続への関心は当初から存在している場合は少なく、現場の体験を通して構築される。非日常性や場所の魅力など、観光的な要素も継続的な参加動機として重要である。

第三に、観光に欠かせない身体的移動とその結果としての自然や地域の人びととの出会いは、コミュニティを想像の領域だけのものではなく、特定の場所へと接続し、一つの新たな実体的コミュニケーション・コミュニティを形作る可能性がある。